日本語の格助詞「に」に関する中国語話者の誤用分析

羅希*
luckyrarecosmos@gmail.com

<目次>

1．はじめに
2．格助詞「に」の分類方法に関する先行研究
3．格助詞「に」の第二言語習得に関する研究
4．中国語の介詞と格助詞「に」
5．小説『ひとり日和』における格助詞「に」の用例と中国語訳
6．穴埋め形式のアンケート調査結果からみる中国語話者の誤用
7．誤用の原因分析と解決方法の提案
8．おわりに

主題語: 格助詞「に」(Japanese auxiliary word “に”)、分類方法(the method of classification)、中国語話者(the Chinese learners)、誤用分析(the analysis of misuse)、第二言語習得研究(the research of learning a second language)

1. はじめに

1-1 研究の背景

近年、日本に来る中国人留学生が大幅に増加している。平成21年の統計(統計局ホームページ)によると、日本の大学(短期大学を含む)で勉強している中国人の人数は63000人に達し、留学生総数の6割以上を占めている。中国国内でも、貿易などのためにますます多くの人が日本語を勉強しはじめた。日本語を教える塾や別科の集中講義には日本語能力試験の合格を目指す人々が集まり、非常に盛んである。

日本文化は儒教文化にも影響され、漢字を使ってきた。その理由で日本語が学びやすいと思う中国人も少なくない。だが、言語の類型論からいうと、日本語は膠着語に属し、屈折語の性質も少し帯びている。一方、中国語は孤立語に属する。つまり、文の構成からみると日本語と中国の違いがかなり大きいとは言える。中国語のような各単語がそれぞれ実

＊ 立命館大学大学院修士課程

質的な意味を持ち、文法的機能が語順によって表される言語と異なり、日本語では実質語(名詞や動詞の語幹など)に機能語(助詞や動詞の活用部分など)が付着し、文の中でその語が果たす役割を表す言語である(望月，1972)。「格助詞は膠着言語としての日本語の構造上、実質的意味を表す名詞句と述語の関係を表す機能語として重要な役割を果たす。動詞が文の最後に来る構造を持つ日本語では、格助詞の使い方いかんによっては、文全体の意味が不明瞭となる場合も少なくなく、意思伝達上の妨げとなることも多い」(松田、斎藤，1992, p.192)。そのため、格助詞の文の構成に対する役割とその使い方の研究は日本語教育において極めて重要である。

格助詞の使い方は中国人の日本語初級学習者や上級学習者も誤用を起こしやすい。とりわけ格助詞「に」の使い方は中国語に対応できないことが多く、非常に把握しにくい文法である。従って、格助詞「に」の誤用分析に関する研究はきわめて重要である。

1-2 研究目的

従来格助詞「に」に関する研究は日本国内でも中国でも行われてきたが、多くの研究では一部のニ格の使用方法や、初級か中級学習者の「に」の誤用分析に集中しており、ニ格全体の使用における誤用分析あるいは上級・超上級学習者に対する研究はあまり重要視されていない。しかし、ニ格について用法は非常に多いので、上級・超上級学習者の誤用例を検討しないと、どの使用方法が最も習得しにくいのか、把握するのに時間がかかる。したがって、本稿は、①格助詞「に」のどの使い方が最も誤用しやすいか、②その誤用が起こる原因、③また誤用を避けるために、どのような点に注意すべきなのか、の三つの問題を取り上げ、格助詞「に」のほとんどの使用事例を調査し[1)]、アンケート調査を通じて、学習者の使用の誤用率を調べ、その問題点と解決策を探る。また学校現場においての中国人に対する最も効率的な日本語指導方法についても明らかにしたい。

2．格助詞「に」の分類方法に関する先行研究

菅井氏(2007)は、格の分析の方法論について方法論的に重視すべきことは、「①形態格そ

1) ただし、複合格助詞「に対して」「に関して」などは検討範囲以外にする。

のものの意味をできるだけ単純な形で一元的に記述することと、②その意味記述に基づいて、その格が関連する文法現象を包括的に説明できること、の2つの条件を満たす理論を目指さなければならないという点である」と述べる。だが、従来の学者は①か②のどちらかに中点を置いて研究してきた。また菅井氏は、①の分析方法は、「やはり関連する文法現象(特に交替現象)を説明する原理を提示するには至っていない」という。

本稿はこれらの研究成果を踏まえ、格助詞「に」の文法現象を明らかにするもので、主に②に基づいて分析検討を行ないたい。

2-1 20世紀90年代以前

現代日本語における格助詞「に」の使用方法については、数多くの言語学者の定義がある。『日本語国語大辞典』(1972)には、格助詞「に」の使用方法が詳しく述べられているが、およそ17種類に分類されている。日本語古典語研究者の松尾拾などは、『助詞助動詞概説』(1983)において、「に」の古典語用法と現代語用法の両方含めて12種類が存在するという。さらに、『研究資料日本語文法第7巻』(1985)にも15種類の使用方法がまとめられている。90年代以前は格助詞「に」の使用方法の分類に関する研究が多いが、「に」の機能の本質、文の中の「に」の役割、「に」とほかの助詞や動詞との関係についてはそれほど分析が行われていなかった。

2-2 20世紀90年代以降

90年代以前の研究に対して森田(1990)は、「助詞の使い分けに関し、一般の辞書類や文法書では、単にその助詞自体の意味や用法を分類し、箇条書き的な解説を行い、用例をいくつか示すのみで、特に後続動詞とのかかわり合いや、それをもとにした各助詞の本質的機能の問題、さらには各助詞間の意味・用法条の違いなどにふれていない」(p.172)と言い、「前後文脈とそこにあるべき助詞との有機的関係を整理し、助詞の選択が表現の発想にまで結びつくような、文論・表現論的立場から文法記述が要請される」(p.172)としている。したがって、森田の『日本語学と日本語教育』における格助詞の使い方についての検討は、個条書き的な分類整理ではなく、各場面の文脈に基づいた分析である。このような分類方法は各助詞の使い方を比較しながら、理解を深める効果があるという。格助詞「に」の使い方に

ついても、時点の言い方、場所の言い方、時間・期間の言い方、数量の言い方、対人関係を表す言い方、物・事に基づく言い方の6種類に分類している。

2-3 21世紀以降

日本語記述文法研究会(2009)も森田(1990)と同じく、各場面の文脈に基づいて分析した。『現代日本語文法2』(2009) は格助詞「に」の使用方法について複合格助詞を含まない場合は12種類に分類し、細かく分ければ、22種類とした。以下は、『現代日本語文法2』(2009)の分類をまとめたものである。

(1) 主体を表す「に」

主体を表す「に」は述語で表される事態の成立する場所・範囲として主体を表し、所有の主体、能力の主体、心的状態の主体がある。

① 所有の主体：ある対照の持ち主としての主体

② 能力の主体：能力や知覚状態の持ち主としての主体

③ 心的状態の主体：ある知覚、感情、感覚が成り立つ存在としての主体

(2) 対象を表す「に」

「に」は方向性を持つ動詞や心的状態を表す動詞の中の対象を表し、動作の対象と心的活動の対象に分かれる。

① 動作の対象：「逆らう」、「はむかう」など動詞の対象

② 心的活動の対象：「憧れる」、「飽きる」など心的活動を表す述語の対象

(3) 相手を表す「に」

「に」は相手を表す中心的な格助詞であり、方向性がある動作の相手を表し、動作の相手、授与の相手、受け身的動作の相手、基準としての相手がある。

① 動作の相手：動作が向かう先としての相手

② 授与の相手：物ややりとりにおける受け手としての相手

③ 受け身的動作の相手：主体が何らかの行為や影響を受ける際の相手

④ 基準としての相手：主体を述べるための基準となる相手

(4) 場所を表す「に」

① 存在の場所：事物が存在する場所

② 出現の場所：事物がある場所の内部で発生し、存在するような場所

(5) 着点を表す「に」

「に」は着点を表す最も基本的な格助詞であり、移動の着点と変化の結果の意味がある。

① 移動の着点：到達点と接触点に分かれる。

② 変化の結果：変化の前から後へという方向性がある点

(6) 手段を表す「に」

「に」は手段としての用法は内容物と付着物に分かれる。

① 内容物

② 付着物

(7) 起因・根拠を表す「に」

「に」が感情・感覚などを表す場合には、その感情・感覚が生じる起因を表す。そのほか、述語が継続する状態を表現する場合には、その原因との自然現象を表す。

① 感情・感覚の起因：精神的・生理的な状態や変化をもたらす起因を表す

② 継続的状態の起因：継続する自然現象の起因を表す

(8) 時を表す「に」

「に」は絶対的に指し示す時点が決まる名詞の後につく。

(9) 領域を表す「に」

「に」は述語で表される認識の成り立つ領域を表し、有情物を表す名詞に限らず、国、組織など領域のような名詞につく

(10) 目的を表す「に」

「に」は述語が移動する目的を表す。

(11) 役割

「に」は述語で表される行為に対し、その行為の意味を明示する名詞につき、「として」の意味を持つ。

(12) 割合

「に」は期間や数量など基準の単位につき、そのうちの部分量を直後に続けて表し，一定数と部分量は同じ単位を取ることが多い。

この文法書は外国人向けの日本語教育のために書かれ、「日本人の手で、日本語で書かれた参照文法」と評価されている。『現代日本語文法②』では、格助詞「に」の使用方法を詳しく分類し、緻密に説明している。本稿はこの分類方法に基づき、実例分析を実施する。

3．格助詞「に」の第二言語習得に関する研究

文法的に複雑な格助詞「に」は、外国人学習者にとって非常に習得しにくい助詞であり、それに対する研究も少なくない。だが、多くの研究は二格の一部の用法に限られており、「に」と「で」、「に」と「へ」などの用法、場所を表す「に」と中国語や韓国語の対照研究は何人かの研究者によって行われているが、全体的に見ればその研究は充分とは言えない。

水野(1987)は、場所を示す中国語の介詞「在」と日本語の格助詞「に」「で」について研究を行った。その研究において、中国語の介詞「在」の連語「在＋場所」が動詞の前に置かれる形式に、日本語では基本的に「で」が対応し、動詞の後ろに置かれる形式には「に」に対応することが多い。一方、状態または動作・結果の状態に重点がある動詞を用いた存在を表す文では「在」が動詞の前か後ろにあることにもかかわらず、日本語では「に」となる。

近年、第二言語習得研究における「に」の習得過程や「へ」や「で」との使い分けに関する論文も現れた。杉村(2004)は日本語の母語話者と日本語上級・超上級学習者に対し同じ「に」と「へ」の使い分けのテストをした。また、下野(2005)が英語を母語話者とする日本語初級・中級学習者を対象にして、絵を見ながら話すテストを行った。調査の結果からみると、「初級学習者は、社会、知覚、倫理的領域の「に」の正用率がいずれも正用全体の10％前後と非常に頻度が低い」といい、中級学習者は日本語のレベルが上がるので、抽象的意味の使用頻度が上がることを示した。

これらの先行研究から見ると、初級・中級学習者を研究対象としてのニ格とデ格、へ格の誤用研究が多く、ニ格の場所、方向を表す使用方法に重点が置かれている。また、2年以上日本語を勉強した上級・超上級学習者を対象とする調査が少ない。このような学習者たちはニ格の比較的に難しい文学的な用法(例えば、手段を表すニ格、役割を表すニ格)をどのくらい把握が可能か、もしできなければ原因はどこにあるのかといった研究はほとんど行われていない。

4．中国語の介詞と格助詞「に」

介詞は中国語品詞の一つであり、構文に非常に重要な成分である。介詞の定義としては、「名詞、代詞あるいは一部の連語の前に用いて、ある種の特別なシンタックス機能を

持った連語(この種の連語の主要なシンタックス機能は連用修飾語になることで、補語になることもできる)を組み立てる単語」(李臨定，1993，p.26)である。中国語の介詞は日本語の格助詞に対照されることが多い。

(1)「在」介詞連語文

介詞「在」はよく「在+場所/時間/抽象名詞」という構成で用いられ、事物の発行場所、時間、条件などを表す。(李臨定，1993，p.203)「在」の一部の用法は日本語の格助詞「に」に対応するが、文脈によって格助詞「で」や「を」にも訳する[2)]。

①「在」介詞連語文が場所を表すもの

(ア)「在」介詞連語が述語の前にある

例：他在桌子上放了几本书。 (彼は机に本を数冊置きました。)

他在床上躺着。 (彼はベッドで横になっています。)

他在河边上小心地走着。 (彼は川べりを気をつけて歩いています。)

(イ)「在」介詞連語が主語の前にある

例：在桌子上他放了几本书。 (テーブルの上に、彼は本を数冊置きました。)

在他家里我遇见了一位老朋友。 (彼の家で、私は一人の古い友人に出会いました。)

(ウ)「在」介詞連語が述語の後にある

例：他把几本书放在桌子上。 (彼は本を数冊、机の上に置きました。)

他把钱都存在银行里。 (彼はお金を全部銀行に預けました。)

(エ)「在」介詞連語が賓語[3)]の後にある

例：他放了几本书在桌子上。 (彼は本を数冊机の上に置きました。)

他塞了一块糖在嘴里。 (彼はキャラメルを一つ口に押し込みました。)

以上の例から見ると、中国語の「在」介詞連語が場所を表す場合、「在＋場所」という語順で現れる。日本語に訳すると、おもに場所を表す格助詞「に」と「で」が使われる。ある表現では、「を」も使われる。だが、どちらが使われるのかは場所に関係なく、事物の動作や状態に関係ある。つまり、述語が静態のとき、「に」が使われ、動態のとき「で」が使われる。格助詞「に」の訳文での使用状況に関しては、(ア)「在」介詞連語が述語の前では「に」、「で」、「を」が使われ、(イ)「在」介詞連語が主語の前にある場合には、「に」「で」が使われている。

2) ここで使用する例文は筆者の作文である。

3) 目的語のことである。筆者注。

一部の文では格助詞「に」が使われ；(ウ)「在」介詞連語が述語の後、(エ)「在」介詞連語が賓語の後にある場合に、ほとんどの文では格助詞「に」が使われている。

②「在」介詞連語文が時間を表すもの

(ア)「在」介詞が述語の前にある

例：他在下午写作业。 (彼は午後Φ[4]宿題をします。)

我们在吃饭前洗手。 (食事の前に手を洗います。)

(イ)「在」介詞連語が主語の前にある

例：在哥哥回来之前，我已经到家了。 (お兄さんが帰る前に、私はもう家に着きました。)

在某天深夜，爸爸失踪了。 (ある日の夜Φ、父が行方不明になりました。)

(ウ)「在」介詞連語が述語の後にある。

例：他生在1961年。 (彼は1961年に生まれました。)

这起事故发生在昨天。 (この事故は昨日Φ起こりました。)

このように、時間を表す「在」介詞連語は日本語に訳するときに、「在」の文にある位置にも関わらず、主に格助詞「に」を使われるが、文によって無助詞(時間名詞の「明日」「今日」「午後」など)の場合もある。

③「在」介詞連語がある抽象的な意味を表すもの

(ア)「在」介詞連語が述語の前にある

例：全国在新总统的领导下变得富裕了。 (全国が新大統領の指導のもとで、豊かになりました。)

这个秘密在主妇间传播着。 (この秘密が主婦の間に伝わっています。)

(イ)「在」介詞連語は主語の前に来る。

例：在新总统的领导下，全国变得富裕了。 (新大統領の指導のもとで、全国が豊かになりました。)

在主妇间，这个秘密传播着。 (主婦の間に、この秘密が伝わっています。)

(ウ)「在」介詞連語が述語の後にある。

例：参加会议的人数控制在50人以下。 (会議に参加する人は50人以下に抑える。)

每人购买的饮用水限制在2瓶以内。 (各人の飲用水を買うのは2本以内に限る。)

---

4) 無助詞。

「在」介詞連語が抽象的な意味を表すとき、述語の前にある「在〇〇的范围内」(〇〇の範囲で)「在〇〇的变化中」(〇〇の変化で)「在〇〇问题上」(〇〇の問題で)は日本語に訳すると、格助詞「で」となり、「在〇〇间」(〇〇の間に)「在〇〇中」(〇〇の中に)のようなある群体や団体に起こすことを表す場合に格助詞「に」を使う。また、述語の後にある「在」介詞連語には、多くの場合述語が「控制」(抑える)「限制」(制限する)「保持」(保つ)など少数の動詞に限られるので、「〇〇に制限する」のように、格助詞「に」が多くに使われる。

(2)「対」介詞連語文

介詞「対」は「対＋対象(人/物/事柄)」で使われる。(李臨定, 1993, p.230)

(ア)「対＋人」

例：我对他很了解。 (私は彼をよく知っています。)

我对他很关心。 (私は彼にとても心を配っています。)

(イ)「対＋物」

例：我对这种说法不怎么喜欢。 (私はこのような言い方が気に入りません。)

我对这种问题不怎么明白。 (私はこのような質問があまりわかりません。)

(ウ)「対＋事柄」

例：母亲对儿子常逃学很担心。 (母親は息子がよく不登校するのをとても心配しています。)

我对早起床怎么都习惯不了。 (私は早く起きるのになかなか慣れないです。)

このように、「対」介詞連語文を訳すと、「対」は格助詞「に」「が」「を」に対応できる。どちらを使うかは、「対」が取り上げる対象ではなく、述語によって決まる。

(3)「向」介詞連語文

介詞「向」は動作行為の方向、動作行為の向けられる相手を表す(李臨定, 1993, p.236－p.241)。「向」は方向を表すとき、「向＋場所＋動作行為」という構成であらわれ、動作の相手を表すときには、「向＋動作の相手＋動作行為」である。

(ア)「向」の賓語が場所を表す連語あるいは方位詞

例：请先向左转，再一直走。 (まず左に曲がって、そしてまっすぐ行ってください。)

他向着出口走去。 (彼は出口へ行きました。)

(イ)「向」の賓語が名詞または人称代詞

例：小狗向我扑过来。 (子犬は私にとびかかってきました。)

鹰向着深林飞去了。 (鷹は森へ飛んで行きました。)

(ウ)「向」の賓語を述語の後ろに移せるもの

例：他向我借了字典。 (彼は私に辞書を借りました。)

我向老师问了两个问题。 (私は先生に質問二つを聞きました。)

このように、「向」は賓語がどのようになると関係なく、文脈によって「に」か「へ」に訳す。

(4)「給」介詞連語文

介詞「給」は「行為・動作の受益者を示す」(劉月華　等，1996，p.225、p.246~p.248)。「給」介詞連語は「給＋人＋物」か「給＋人/物＋動作補語」という構文で使われる。

(ア) 介詞「給」は物や事柄の受け手を引き出す。

例：我给你带了礼物。 (私は君にプレゼントを持ってきました。)

妈妈给我做了漂亮的衣裳。 (母は私にきれいな洋服を作ってくれました。)

(イ) 介詞「給」は動作・行為の受益者を引き出す。(「為」、「替」に相当する)

例：他不愿给国民党做官，于是逃跑了。 (彼は国民党に役人を仕えることを望まず、逃げました。

我不想给你做作业，你自己做。 (君に宿題をしてやりたくないから、自分でやって。)

(ウ) 介詞「給」は動作・行為の対象を表す。(「朝」、「向」、「対」の意味を持つ)

例：组长给我们介绍了新的技术。 (係長は私たちに新しい技術を紹介してくれました。)

他给我讲了很多故事。 (彼は私に昔話をいっぱい話してくれました。)

(エ) 介詞「給」は動作・行為の仕手を表す。(「被」に相当する)

例：那么好的房子全给他们烧了。 (あんなにいい家だったのに彼たちに焼かれてしまいました。)

我给他问住了。(私は彼に問い詰められました。)

このように、「給」介詞連語はほとんど格助詞「に」に訳すことができ、能動の文で受け手、受益者を表し、受動の文で動作の仕手を表す。

以上、中国語の介詞がどのくらい、どのように日本語の格助詞「に」に対応するかについて検討した。中国語の介詞は構文的に日本語の格助詞に似ているところがあるが、一つの

介詞の意味や用法は多数の格助詞に絡み合い、見分けが難しい。さらに、「に」に関係が深い介詞「在」、「対」、「向」、「給」を持つ中国語の文の日本語訳を調査してみると、格助詞「に」以外は「で」、「を」「が」「へ」また無助詞で示すのが多いことがわかった。したがって、中国語話者はそれらの格助詞の特徴に注意しなければ、非常に誤用が起こりやすいと考える。

5．小説『ひとり日和』における格助詞「に」の用例と中国語訳

5-1 小説『ひとり日和』における格助詞「に」の用例と中国語訳

小説『ひとり日和』は、2007年に芥川賞を受賞した作品であり、2007年9月には中国語版が出版され、それ以来話題の小説になっている。高い売り上げはもちろん、中国のネット掲示板にはこの小説に対する討論も多く見られる。以上の理由からこの小説は、現代日本語の使用状況を反映していると考え、研究対象として比較分析を行う。

(1) 主体を表す「に」

① 所有の主体

一緒に暮らしてまだ一ヶ月と少しだが、あのおばあさんにには少し薄情なところがある気がしていた。(p.30)

一起生活才一个月多一点，我就发现这个老太婆有点冷酷。

② 能力の主体

わたしには全く意味のわからない言葉に「くそ」だの、「マジ」だの、一人で興奮している。(p.13)

……嘴里不停地冒出乱七八糟我根本听不懂的词，什么“混蛋”啦“哇——”的，一个人玩的还挺起劲。

③ 心的状態の主体

「おばあちゃんって、楽？」

「ふふ。知寿ちゃんには、そう見える？」

「見える。若者は全然楽しくない」(p.151)

“舅姥姥，您觉得幸福吧？”

“呵呵，知寿这么看？”

“是啊。年轻人一点儿都不幸福。”

(2) 対象を表す「に」

① 動作の対象

~テレビに集中しているふうにきっと目を凝らすか、横たわって眠りふりなどをする。(p.28)

……并作出很专注(电视节目)[5]的样子目不转睛地看，或者装困躺倒等等。

② 心的活動の対象

その日焼けした腕に、こんなときでもわたしは少し見とれた。(p.35)

尽管在这种尴尬的场合，他那晒得黑黝黝的胳膊，还是那么吸引我。

(3) 相手を表す「に」

① 動作の相手

吟子さんには、コンパニオンのアルバイトのことは言っていなかった。(p.29)

我没有对吟子说具体打什么工……

② 授与の相手

母はわたしにきれいなサンダルを買ってくれた。(p.81)

妈妈给我买了双漂亮的凉鞋……

③ 受け身的動作の相手

吟子さんのような弱々しいおばあさんにどう思われようが、たいした問題ではなかった。(p.30)

像吟子这样柔弱的老太婆怎么看我没什么大不了的。

「常備薬、ないんですか？いつも医者にもらってるやつとか」(p.31)

“有没有常备药？或者医生平时给开的药？”

④ 基準としての相手

それはじぶんが吟子さんに意地悪なことを言うときの声に似ているようで、ふいに背筋が冷たくなった。(p.94)

……很像我讥讽吟子时的腔调。霎时间，我感到背脊有股子凉气。

(4) 場所を表す「に」

① 存在の場所

5) 文の筋が通るように筆者が加えたもの。

テーブルの上に、ホースケさんのセカンドバッグが置いてある。(p.85)

桌子上放着芳介的手包……

② 出現の場所

蛍光灯のひもをひくと、コッコン、と音がして白い光が部屋に広がる。(p.3)

她拽了一下日光灯的灯绳，咯嚓一声，屋里立刻充满了白色的光线。

(5) 着点を表す「に」

① 移動の着点

到達点

一緒に電車の通過を待っていた人のほとんどが外に出て、その光景を無言で見つめている。(p.97)

和我们一起等特快通过的乘客几乎全部下了车，默默地看着这一切。

接触点

紙や冷たいプラスチックの感触の中で、手触りのいい布で覆われた小さな箱に行き当たった。(p.32)

……除了纸和凉凉的塑料之外，触到了一只手感很好的布盒子……。

② 変化の結果

心に反して、ものわかりのよい人になってしまった。(p.118)

和心里想的相反，我表面上变得特别通情达理了。

(6) 手段を表す「に」

① 内容物

朝、目覚めるとまっさらな自分で、シーツはじとっと湿り、体重は重いけれどもよい予感に満ちている。(p.52)

早上醒来后，有种焕然一新的感觉，床单潮湿得不行，身子也懒懒的，却充满良好的预感。

② 付着物

それが終わると、吟子さんが紫のフリルだらけの衣装に身を包み、その他大勢のお年寄りと一緒に登場した。(p.113)

演奏结束后，吟子穿着紫色的百褶裙，和很多老年人一起登了台。

(7) 起因・根拠を表す「に」

① 感情・感覚の起因

食事が終わって短い会話を交わしたあと、沈黙に耐えられなくなると……(p.28)

吃完饭，简单聊上几句后受不了沉默时……

② 継続的状態の起因

道の端に捨ててあったビニール袋が強風に舞って、信号待ちをする車のフロントガラスに貼り付いている。(p.103)

路旁丢弃的塑料袋随风飘舞，贴到等信号灯的汽车的挡风玻璃上。

(8) 時を表す「に」

① 時名詞

お正月に吟子さんを一人にしてしまうことには、少し気が引いた。(p. 137)

新年把吟子一个人丢在家里，有点对不住……

② 期間名詞

私を待っていたこの一時間半ほどのあいだに、二人はああしてずっとしゃべっていたのだろう。(p.105)

在等我的这一个半小时里，两个人一直在聊天吧。

(9) 領域を表す「に」

東京でアパート借りるには、何十万円も必要だということを知っていたし、……(p.25)

我知道在东京租公寓得几十万……

(10) 目的を表す「に」

母は立ち上がって、住所録を探しに行った。(p.25)

妈妈起身去找电话本。

(11) 役割

ソビエト時代に出張した叔父がお土産に買ってきたことがあるので、見覚えがある。(p.12)

在苏维埃时代去苏联出差的叔叔曾经给我买过，所以有印象。

(12) 割合

三回に一回ほど、わたしは拒む。(p.15)

差不多三次有一次我会拒绝他。

以上、『ひとり日和』の日本語と中国語の本文を比較検討してみた。中国語訳をみると、多くの「に」の使用が見えなくなっており、介詞のある文だけが自然にその構文に対照して示されていることが分かる。「对」「在」「给」介詞連語に通訳した動作の相手を表す「に」、授

与の相手を表す「に」、期間名詞を表す「に」以外は、ほとんど語順あるいは中国語の特定の表現方法で表されている。もちろん、中国語の受身表現に「被~」(~に~される)にも一般的に対応するが、多くの文は日本語では受身形で表現するが、中国では必ずしもそうではない。

このように中国語人話者は格助詞「に」に接触する際、一部の文だけは自然と中国語の「介詞」に対照しているので理解は可能であるが、多くの文は直接対応しないので格助詞「に」の用法を学習させるか、彼らの使う文脈を検討して対応する必要が生じる。

5-2『ひとり日和』と教科書における格助詞「に」の出現頻度

小説『ひとり日和』には、格助詞としての「に」が全体で1002回も使用されていた。着点の「移動の着点(到達点)」が最も多く、233回使われ、全体の23.2%を占めている。そのほか、「存在の場所」、「変化の結果」も187回、117回使われ、第2位、第3位なった。「心的状態の主体」と「継続状態の起因」の「に」の使用が最も少なく、わずか2回しかなく、それぞれ全体の0.3%にも及ばなかった。その他、「割合」、「手段」、「領域」「役割」を表す「に」が、あまり使われなく、10回を下回った。

学習者がある文法をうまく把握できるかどうかは使用される教科書にも関わると考える。ある文法現象は教科書で強調されると、学習者に印象を残す。本稿は立命館アジア太平洋大学の学習者を対象として研究するので、これらの学習者たちが使用した教科書に格助詞「に」の出現頻度を調査する。ここでは、2007年、2008年立命館アジア太平洋大学で使用した教科書『日本語初級Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ』、『日本語5つのとびら中級、中上級編』、『日本語5つのとびら　中級、中上級編　漢字・語彙練習』に現れた格助詞「に」の使用方法に関する部分を抽出する。

立命館アジア太平洋大学で使用される初級から中上級までの教科書には「移動の着点(到達点)を表す『に』」、「時点を表す『に』」、「存在の場所を表す『に』」、「目的を表す『に』」、「割合を表す『に』」、「変化の結果を表す『に』」、「移動の着点(接触点)を表す『に』」、「授与の相手を表す『に』」、「受身的動作の相手を表す『に』」、「動作の相手を表す『に』」「期間を表す『に』」「心的活動の対象を表す『に』」、「動作の対象を表す『に』」、「所有の主体を表す　『に』」、「領域を表す『に』」の15種類が出現した。「移動の着点(到達点)を表す『に』」、「時点を表す『に』」、「存在の場所を表す『に』」は最も早く教授され、「動作の対象を表す『に』」の出現頻度は最も多く、およそ8回であった。

6．穴埋め形式アンケートの調査結果からみる中国語話者の誤用

6-1 アンケート調査の目的、対象と人数

・調査目的：立命館アジア太平洋大学の中国人留学生を対象に格助詞「に」の使用方法に対する調査を行い、各使用方法の誤用率を調べるところにある。

・調査対象：立命館アジア太平洋大学で日本語の初級から上級までを履修した中国人学習者

・調査人数：50人

・実施期間：2011年4月13日から15日まで

・調査方式：食堂で中国人留学生にアンケートを配り、回答してもらってからすぐ回収した。

6-2 アンケート内容の説明

アンケートは正確の結果を得るために括弧の答えのところに正解ではない格助詞を混ぜて作った。そのなかの24個の括弧に「に」の24種類の用法が含まれている。次の表は、質問数、問題と使用の「に」を示している。

質問数	問題	使用の「に」
質問1	「お年寄り(に)は」	能力の主体を表す「に」
質問2	「お兄さんの家(に)」	存在を表す「に」
質問4	「昨日の午前中(に)」	期間名詞を表す「に」
	「銀行に貯金し(に)行きました」	目的を表す「に」
	「横柄な態度(に)腹を立てて」	感情・感覚の原因を表す「に」
	「店長(に)文句を言いました」	動作の相手を表す「に」
質問5	「雨(に)煙る道路」	継続状態の起因を表す「に」
質問6	「故郷(に)」	出現の場所を表す「に」
	「この提案(に)心から賛成します」	動作の対象を表す「に」
質問7	「アイドル(に)似ています」	基準の相手を表す「に」
質問8	「回答用紙を先生(に)渡した」	授与の相手を表す「に」
	「あまり復習しなかった私(に)は」	領域を表す「に」
質問9	「お土産で(に)カンガルーのおもちゃ」	役割を表す「に」

	「泥(に)まみれて」	付着物を表す「に」
	「母(に)叱られます」	受身的動作の相手を表す「に」
質問10	「週(に)五回」	割合を表す「に」
	「通学すること(に)しました」	変化の結果を表す「に」
	「ドア(に)ぶつかって」	移動の着点(接触点)を表す「に」
質問11	「私(に)は大きな夢がある」	所有の主体を表す「に」
	「美しい未来(に)あこがれながら」	心的活動の対象を表す「に」
質問12	「日曜日の5時(に)」	時点の名詞を表す「に」
	「家(に)届きました」	移動の着点(到達点)を表す「に」
	「うれしさ(に)満たされました」	内容物を表す「に」

6-3 アンケートの結果

図1　各使用方法の正解率

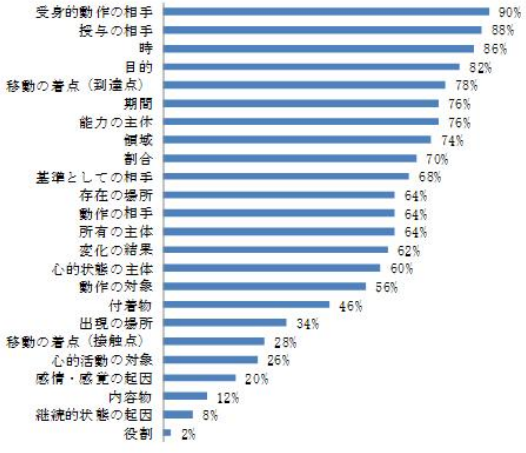
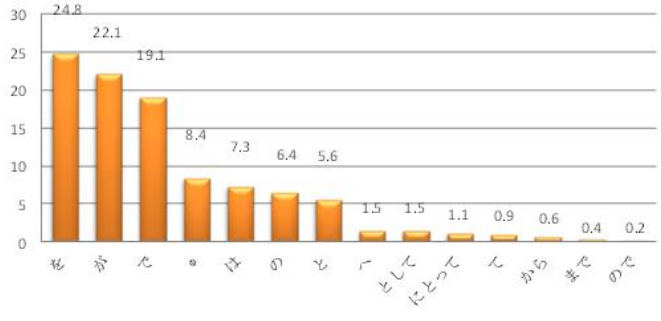


図2　誤用および回避使用の状況(%)



上記のアンケート調査の正解率は56.6%で、半数を上回る人が「に」について正しく答え

ている。一方、間違った格助詞を使ったり、無助詞にしたりする「に」の使用回避という回答が44.4%を占めている。図1は「に」の各使用方法の正解率を示している。図1から見ると、格助詞「に」の使い方の正解率は、「受身の相手を表す『に』」が90％で最も高く、「授与の相手を表す『に』」は88％、「時点を表す『に』」は86％で第二位と第三位となっている。一方、全体的に正解率が最も低いのは「役割を表す『に』」である。「役割を表す『に』」は日本語学習者にとってあまり使われていない表現なので、正解率はわずか2％であった。次いで「継続的状態の起因を表す『に』」が8％で逆から第二位、「内容物を表す『に』」が12％で逆から第三位となっている。

また、この調査で8つの「に」の正解率が50％以下となる。上記の「役割を表す『に』」、「継続的状態の起因を表す『に』」、「内容物を表す『に』」以外は、「出現の場所を表す『に』」(34％)、「心的活動の対象を表す『に』」(26％)、「移動の着点(接触点)を表す『に』」(28％)、「付着物を表す『に』」(46％)、「感情・感覚の起因を表す『に』」(20％)も比較的に正解率が低いことがわかる。

また図2は、穴埋め形式のアンケートであるが、各質問に対して格助詞「に」の他にどのような回答があるのか、またその回答に対する個数を示している。図2が示すように、各質問格助詞「に」以外の回答が格助詞「が」「を」「で」「へ」「と」「から」「まで」、複合格助詞「にとって」「として」、係助詞「は」、並列助詞「の」、接続助詞「ので」、助動詞「て」またそのほか「φ」(無助詞)14種類がある。そのなか、「に」の変わりに「を」を使用する回答が最も多く、24.8%を占めている。次いで「が」(22.1%)、「で」(19.1%)も15%を超え、「を」を加えれば全体の60%を上回っている。そのほか、無助詞「φ」、係助詞「は」、並列助詞「の」、格助詞「と」もそれぞれ5%以上となっている。

7．誤用原因の分析と解決方法の提案

7−1 誤用の原因分析

7-1-1. 母語が第二言語習得に与える影響

第4章では中国語の介詞と日本語の格助詞「に」との関連について論じた。その結果、中国語の介詞は構文的には日本語の格助詞に似ているところもあるが、一つの介詞の意味や用

法は多数の格助詞に絡み合い、見分けが難しいことがわかった。また、「に」の文の中の役割を完全に中国語に訳すことができない例も第3章で検討した。このような母語が日本語に与える影響は免れられないと考える。

たとえば、「役割を表す「に」」のある文「お土産にカンガルーのおもちゃを買ってくれた」は日本語で自然な文であるが、中国語に直訳してみると、「作为礼物(他)给我买了袋鼠玩具」となり、不自然な感じを与えると考える。「他给我买了袋鼠玩具作礼物」のほうが、表現に自然だと言えるが、日本語の訳(彼は私にカンガルーのおもちゃをお土産として買ってくれた)も変わった。したがって、多くの中国人学習者は質問9に戸惑い、文の筋が通るように「として」を回答した人がわずか7人(だが、「複合格助詞をできれば使用しないでください」と言っておいたので、正解とも言えない)しかいない。

「継続的状態を表す『に』」の使用も中国語とだいぶ違う。「雨に煙る道路」(烟雨弥漫的道路)や「ビニール袋が強風に舞って」(塑料袋随风飘舞)も中国語に訳すれば、まったくその起因を表す格関係がなくなってしまい、「が」との混用が非常に多い(50%)。

さらに、「動作の対象を表す『に』」や「心的活動の対象を表す『に』」や「内容物を表す『に』」や「移動の着点(接触点)を表す『に』」などは第2章で述べたように中国語で「動詞＋名詞」という構文で現れ、中国人に理解しにくい用法である。たとえば、「意見に賛成する」、「未来にあこがれる」、「うれしさに満たされる」、「壁にぶつかる」の中国訳を見てみると、「赞成意见」、「憧憬未来」、「充满喜悦」、「撞墙」のように、述語と目的語の間に格助詞がないことがはっきりしている。アンケートの結果からみれば、これらの「に」について中国人学習者には「が」と「を」の誤用が見られた。

7-1-2. 使用頻度の影響

第5章は小説『ひとり日和』における格助詞「に」の使用頻度について論じた。この研究結果から、「役割を表す『に』」、「継続的状態の起因を表す『に』」、「付着物を表す『に』」、「内容物を表す『に』」、「心的状態の主体を表す『に』」の使用頻度が非常に低いことがわかった。さらに、アンケート調査からみると、日常会話には格助詞「に」はよく脱落されているようである。

小説などの文章における使用頻度が低い格助詞「に」は、学習者があまり注意を払う機会が多くない。このような「に」の使用は比較的難しく、レベルが高いので、上級・超上級学習者といっても普段は接触しない。また、第二言語習得研究からみると、日常生活の日本語母語話者からのインプットにも関わる。現在、日本語における会話は年齢層に関係なく助詞が省略される傾向がある。たとえば、「ご飯食べた？」「どこ行く？」など助詞を省略し

た文を使って会話するのはごく普通である。日本で生活する中国人も、日本人の友達と会話する際に、そのような影響を受けて格助詞を脱落することが多いようであり、格助詞の使用が正確かどうかはあまり注意していない。だが、レポートや試験など書面の表現を使うべき際に、格助詞は欠かせないずいぶん大切な文法である。このように、アンケートの回答で中国語話者はほとんど格助詞「に」の誤用を避けることができず、使用頻度が低い「役割を表す『に』」、「継続的状態の起因を表す『に』」、「付着物を表す『に』」、「内容物を表す『に』」、「心的状態の主体を表す『に』」がとりわけ正解率が低いことがわかる。

7-1-3. 教科書が与える影響

教科書のなかでも第二言語の習得に欠かせない重要な要素が多く秘められていると考え、第6章では立命館アジア太平洋大学で実際使用する教科書の分析を行った。この分析結果からは、「移動の着点(到達点)を表す『に』」、「時点を表す『に』」、「存在の場所を表す『に』」が最も早く教授され、「動作の対象を表す『に』」の出現頻度が最も多いことがわかった。一方、アンケート調査の結果からみると、「時点を表す『に』」の正解率が86％、「移動の着点(到達点)を表す『に』」の正解率が78％でかなり高いことを示している。「存在の場所を表す『に』」のほうが64％でやや低いが、半数を超えている。そのほか、教科書に出現した「に」の正解率は「心的活動の対象を表す『に』」(26％)、「移動の着点(接触点)を表す『に』」(28％)を除いてだいたい50％以上となった。だが、教科書に出現しなかった「能力の主体を表す『に』」(76％)や「基準の相手を表す『に』」(68％)もそれぞれ正解率が50％を超えており、出現頻度が最も高い「動作の対象を表す『に』」(56％)の正解率よりも高くなっていることがわかった。したがって、中国語話者の格助詞「に」に対する正解率は教科書の影響を受ける側面もあるが、それは主要な要素ではなく、教員が使用する教授法、または教員が取り上げる例文と局限的ではある関連性のあることが明らかになった。

7-1-4. 文脈の理解の程度

学習者がある文の文脈を理解できるかどうかの問題も、格助詞の使用に影響を与えることが考えられる。たとえば、質問4の「銀行に貯金し(　)行きました」の括弧には「て」と答えた人も5人いる。まず「て」は助詞ではなく、助動詞である。また、この文に動作の主体は「私」なので、「して行きました」という文が成立しないだろう。最後の括弧「店長(　)文句を言いました」のところで、コンテクストをみれば、「文句を言った」のは「店長」ではなく、「私」に決まっている。さらに、「文句」は「店長に対する文句」ではなく「態度が横柄な職員に対する文

句」である。だが、この質問に対して7人は「が」と回答し、3人が「の」と回答した。このような誤用の原因は、文のコンテクストをよく把握していないことと関連するものと思われる。

7-1-5. 格助詞の複雑さ

上記の母語の影響や使用頻度などの原因以外に格助詞そのものの複雑さも誤用の原因の一つだと考える。たとえば「出現の場所を表す『に』」に対して、『現代日本語文法②』は「事物のある場所の内部で発生し、存在するようになる場所」、「さらにその場所の範囲内で動きを展開しつつ存在する場合」(日本語記述文法学会，p.53)に、格助詞「に」を用いる。一方、格助詞「で」で表す動きの場所は「動作を行うことを表す述語や出来事の発生を意味する述語に対して、その動作・出来事の成立する位置」(上に同じ)という。この定義からみると、「出現の場所を表す『に』」と「動きの場所を表す『で』」の使用範囲は少し曖昧だと考える。また、例文からみて、「夜空に星が光っている」、「裏山で火事が起きた」二つの文の構成は一見似ており、格助詞「に」と「で」の選択に陥りがちだ。このような文に対して日本語学習者は方位を表す連用修飾語や述語を一つ一つ緻密に分析しなければ誤用を招く。

さらに、格助詞「に」と「で」が多くの使用で重なり合った。たとえば「付着物」、「感情・感覚の起因」、「継続的状態の起因」を表す格助詞「に」と「で」はだいたい互いに取り替えることができる。アンケートの結果からみると、「で」の使用は「に」より優先された。「感情・感覚の起因」には「で」を書く人が16人、「継続的状態の起因」には11人、「に」を書く人よりずっと多い。

このように、格助詞「に」と「で」の使用が複雑であり、重なり合ったところが多く、日本語学習者に難しい文法である。また、「に」より「で」のほうがよく使われる傾向が見える。

7−2 解決方法の提案

以上の検討から、中国人話者の格助詞「に」の使用に最も影響を与える要因は母語中国語の構文の特徴と日本語の格助詞の複雑さにあることが明らかになった。また、日常生活やアカデミック的な使用頻度、教科書と文脈に対する理解の程度も誤用の原因となることも分かった。中国語話者の格助詞「に」の誤用問題を解決するために次のように提案をしたい。

Ⅰ　中国語の文の構造は「動詞＋名詞」が基本なので、格助詞「に」を帯びる連語を教授する際、述語と目的語の格関係をきちんと説明する必要があると考える。また、理解を深

めるために同類の動詞、名詞の例もあげたほうがいいと思われる。

Ⅱ　中国語の介詞は一部が「に」に対照するが、一つの介詞の意味や用法は多数の格助詞に絡み合うので、それらの介詞はどのような場合に「に」と対応するのか、どのような場合に対応しないのか、中国語の例を参考しながら説明するのが重要だと考える。とりわけ、以前の第二言語習得研究であまり重視されなかった「に」の代わりに「が」の過剰使用が今回の研究で明らかになったので、この点を教育現場で学生にきちんと説明する必要がある。

Ⅲ　格助詞の使用が複雑なので、「に」と「で」や「に」と「と」の用法の細かい異同を上級学習者に教授するのは大切だと考える。

Ⅳ　学生と話すときは、できる限り助詞を使って会話をする。常に助詞を使うような意識を培うことが必要である。

以上、中国人話者の格助詞「に」の誤用問題について論じ、その解決方法について提案してみた。これらはあくまで筆者の主観によるところもあるので、この点については今後さらに追及していきたい。

8.おわりに

以上のように本稿では、まず第二言語習得法や「に」の使用方法についての先行研究を具体的に調べ、検討を行った。また、格助詞「に」に関する中国語の介詞「在」、「対」、「向」、「給」についても詳細に分析を試みた。この結果より、現在中国人上級話者を対象としての第二言語習得研究はほとんど行われていないことが明らかになった。また、中国語の介詞と「に」の対応研究も非常に難しさを伴うこともわかった。さらに、日本の青春小説『ひとり日和』と立命館アジア太平洋大学で使われている教科書を実例として挙げ、比較検討を行った。この研究結果から、『ひとり日和』におけるそれぞれの「に」の使用頻度の統計と中国語訳の比較から、中国語話者が格助詞「に」の習得に難しさを伴うことも究明できた。さらに、立命館アジア太平洋大学の教科書の詳細な分析から、「に」はあまり登場してないことがわかり、それによって日本語学習者に効率的な指導がなされているかどうかの疑問点も浮上してきた。

また、第6章では立命館アジア太平洋大学の中国人留学生を対象としてのアンケート調査

を行い、それを詳しく分析した。その結果、「役割を表す『に』」、「継続的状態の起因を表す『に』」、「内容物を表す『に』」の正解率が比較的に低く、「を」、「が」、「で」との混用が最も多いことがわかった。最後にアンケート調査の結果と先行研究に基づき、格助詞「に」の誤用原因は母語の影響、使用頻度の影響、教科書の影響、文脈の理解の程度、格助詞の使用の複雑さの5つにまとめることができ、その解決方法についての提案も行った。

しかし、筆者はまだ学校現場で日本語を教えた経験がないので、本稿で行った誤用の解決方法についての提案と研究は充分とは言えない。また、格助詞「に」の全体的な誤用の傾向と原因分析は推測の段階にあり、一つ一つの誤用の具体的な原因分析についても今後さらに明らかにしていきたい。また、アンケート調査の形式は穴埋め形式であり、中国人話者の自発的な発話や作文ではないので、完全な調査とは言えない。中国人話者の格助詞「に」の使用、また他の格助詞の使用との見分けや脱落、過剰使用問題などについての研究も今後さらに深めていきたい。

【参考文献】

安田春子 等(2008)「格助詞「に」「で」の誤用研究：タイ・中国の日本語学習者を対象に」『鳴門教育大学実技教育研究』18, pp.19-25
大河内康憲(1982)「格助詞に対応するもの」寺村秀夫　編『講座日本語学10』明治書院
桑田明(1972)『日本語文法探究　上』風間書房
小林幸江(1983)「モンゴル人学習者の作文にあらわれた誤用例の分析」『日本語学校論集 10』、pp.44-53
迫田久美子(2001)「学習者の誤用を産み出す言語処理のストラテジー(1)：場所を表す「に」と「で」の場合 」『広島大学日本語教育研究』pp.17-22
下野香織(2005)「多義助詞「に」の第二言語習得過程」南雅彦　編『言語学と日本語教育Ⅳ』くろしお出版
杉村泰(2005)「上級・超上級日本語学習者に見る格助詞「に」と「へ」の使い分け」『言語文化論集』26(2), pp.91-102
鈴木一彦　林巨樹　編(1973)『品詞別　日本語文法講座9　助詞』明治書院
鈴木一彦　林巨樹　編(1985)『研究日本語文法　第7巻』明治書院
冉愛玲(2008)「日本語の格助詞「に」「で」「を」の習得研究(日中韓3か国合同ジョイントゼミ(北京))『「大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書」　平成19年度 pp.183-186
菅井三実(2007)「格助詞「に」の統一的分析に向けた認知言語学的アプローチ」『世界の日本語教育』17、pp.113-135
高見澤孟　監修(2004)『新・はじめての日本語教育1』株式会社アスク出版
張麟声(2001)『中国語話者の母語干渉20例』スリーエーネットワーク
寺島秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部(2001)『日本語国語大辞典　第二版　第十巻』小学館
日本語記述文法研究会 編(2009)『現代日本語文法②』くろしお出版
仁田義雄 編(1993)『日本語の格をめぐって』くろしお出版

松尾拾(1970) 橋本進吉　編『助詞・助動詞の研究』pp.340-346、筑摩書房
松田由美子、斎藤俊一(1992)「第2言語としての日本語学習に関する縦断的事例研究」『世界の日本語教育』2、pp.129-156
丸山直子(2010) 「助詞「に」を伴う＜役割＞成分」『日本語文法』10巻1号、pp.71-87
水野義道(1987) 「場所を示す中国語の介詞＜在＞と日本語の格助詞「ニ」「デ」」『日本語教育』62号、pp.105-117
望月八十吉(1974)『中国語と日本語』光生館
茂木亮輔(1999)「連想検査法を用いた格助詞「に」の意味構造分析」『自然言語処理研究会報告 』99(95), pp.131-137
森田良行(1990)『日本語と日本語教育』凡人社
森山新(2010) 「格助詞ヲ、ニ、デの意味構造とその習得に関する認知言語学的研究」『日本語の学習と研究』150号、pp.16-27
李臨定(1993)『中国語文法概論』宮田一郎訳　光生館
劉月華　等(1996)『現代中国語文法総覧』くろしお出版
和気愛仁(2000) 「ニ格名詞句の意味解釈を支える構造的原理」『日本語科学』7、pp.70-94
平成22-23年来日外国人留学生数、統計局ホームページhttp://www.stat.go.jp/data/nihon/backdata/22.htm (2011/05/30アクセス)
青山七恵(2007)『ひとり日和』河出書房新社
青山七恵　著　竺家荣 訳(2007)『一个人的好天气』上海译文出版社

논문투고일 : 2012년 03월　10일
심사개시일 : 2012년 03월　20일
1차 수정일 : 2012년 04월　10일
2차 수정일 : 2012년 04월　16일
게재확정일 : 2012년 04월　20일

中国人学習者の日本語の助詞使用に関する調査

私は立命館アジア太平洋大学4年生です。卒業論文を書くために中国人学習者の日本語の助詞使用について調査することになりました。このアンケートは、卒業研究のために実施するものであり、あくまでも日本語の助詞に対する誤用分析を目的とし、他の目的で使用することは一切ありません。また、ご回答いただいた方のプライバシーに関わる情報は責任を持って管理いたします。お忙しいとは存知ますが、ご協力いただけると非常に助かります。よろしくお願いいたします。

性別：　　年齢：

学年：　　出身地：

次の文の括弧に助詞を入れてください。同じ助詞を何回使ってもかまいません。

1. この本の文字(　)小さくて、読みにくいです。お年寄り(　)は、読めるはずがないでしょう。
2. お兄さんの家(　)、猫三匹と犬2匹がいます。私(　)は、猫は犬(　)可愛いと思う。
3. 大学(　)卒業した後、仕事で毎日4時間しか寝なくなってきた。過労(　)体をこわしてしまった。
4. 昨日の午前中(　)、銀行に貯金し(　)行きましたが、ある職員(　)けんかして、できなかったです。その職員の横柄な態度(　)腹を立てて、店長(　)文句を言いました。
5. 昨日(　)、雨(　)煙る道路で事故が起きました。この事故(　)、3人が死亡し、8人が重傷(　)負いました。
6. 故郷(　)、省エネブームが起きています。今年、政府が太陽エネルギー発電所を建設するという提案(　)発表しました。私はこの提案(　)心から賛成します。
7. 駅で、お姉さん(　)別れました。彼女は白いワンピースを着て、アイドル(　)似ています。
8. 朝5時(　)試験を準備してきました。試験が終わって、回答用紙を先生(　)渡した瞬間ほっとした。あまり復習しなかった私(　)は、今回の試験はとても難しかったです。
9. 叔父は出張(　)オーストラリアに行ってきました。お土産(　)カンガルーのおもちゃを買ってくれました。弟に貸したら、すぐ泥(　)まみれて、ぼろぼろになってしまいました。弟は私(　)違って、あまりものを大事にしないので、よく母(　)叱られます。
10. 私は週(　)五回学校に行きます。先週までバス(　)通学しましたが、よく乗り遅れて、遅刻していたので、今週から自転車(　)通学すること(　)しました。しかし、今朝商店のドア(　)ぶつかって、入院してしまいました。

11. 私(　)は大きな夢がある。その夢(　)実現するために、毎日頑張って働いています。美しい未来(　)あこがれながら、落ちついてしっかりするの(　)非常に大切なことだと思います。
12. やっと、日曜日の5時(　)恋人の手紙が家(　)届きました。「太郎(　)花子(　)」という文を見て、彼女の心がうれしさ(　)満たされました。

最後に日本語の助詞を勉強する際、最も困難を感じることは何ですか。

ご協力ありがとうございました。

以上

付記

本稿は2011年6月、立命館アジア太平洋大学に提出した卒業論文の一部を修正、加筆したものである。論文作成に当たりご指導を賜ったゼミ担当教授の金賛會先生と日本語教育担当の宇根谷孝子先生に深く感謝の意を表したい。

<要旨>

日本語の格助詞「に」に関する中国語話者の誤用分析

本研究は、中国人話者が日本語の格助詞「に」を使用する際、どのような誤用またどのような傾向があるかという問題を明らかにすることを目的とした。従来の研究は第二言語習得に関する格助詞「に」と「で」「へ」「を」との違いを探ることに集中してきており、ほかの格助詞や「に」の全体的な使用方法に注目する者が少ない。したがって、本研究では、①格助詞「に」のどの使い方が最も誤用しやすいか、②その誤用が起こる原因、③また誤用を避けるために、どのような点を注意すべきか、三つの問題を提起し、それを検討する。

この問題を研究するために、立命館アジア太平洋大学の中国人留学生を対象として穴埋めアンケートを実施した。格助詞「に」の24種類の使用方法を基づいて質問を作り、誤用また使用回避の傾向をまとめた。

その結果、①「役割を表す「に」」、「継続的状態の起因を表す「に」」、「内容物を表す「に」」の正解率が比較的低く、「を」、「が」、「で」との混用が最も多いことがわかった。②誤用原因は母語の影響、使用頻度の影響、教科書の影響、文脈の理解の程度、格助詞の使用の複雑さ5つであると推測し、③格助詞「に」を教えるとき、中国語の構文の特徴、介詞との対照、ほかの格助詞との見分けの説明、学生に対するインプットの4つの点を注意すべきだと考える。

The Misuse of Japanese Auxiliary Word “に”by Chinese learners

This report is mainly about when using Japanese auxiliary word “に”, what kind of mistakes Chinese students usually made and their tendency. Most of the language researchers did lots of work in discrimination the word “に” and the other auxiliary words for second language learning while ignoring the entire usage of “に”. Therefore in this report I investigated 3 questions: which usage of “に” was most misused by students, the reason why it was misused and at language education site how we could avoid the misusing by the students of learning second language.

As the result of this report, we found that these “に”’s percent of rightness were considerably low: the “に” which stands for duties, the “に” which stands for the reason of sustained status and the “に” which stands for the inclusion. When students used these kinds of “に”, lots of them mistook “に” with other auxiliary word such as “を”, “が” and “で”. I inferred these errors in 5 reasons: the influence which caused by the first language of the student, the frequency the “に” used, the influence of the textbooks, a degree how the student understanding the context and the complication of learning auxiliary words. For these reasons while teaching the usages of “に” the instructor should pay attention to the syntax of Chinese language and the Chinese preposition, and tell the students how to distinguish “に” from other auxiliary words. In the case out of class the instructor should also use “に” but not omitting.